

延慶本『平家物語』について

萩原 義雄

はじめに

『平家物語』という作品名を聞いて、巻第一冒頭書き出しの「祇園精舎乃鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花乃色、盛者必衰のことはりをあらハす。おこれる人も久しからず、只春乃夜の夢乃ごとし。……」を聞いたことがない人はいまい。琵琶法師による「平曲」という語りの世界として世に知られ、

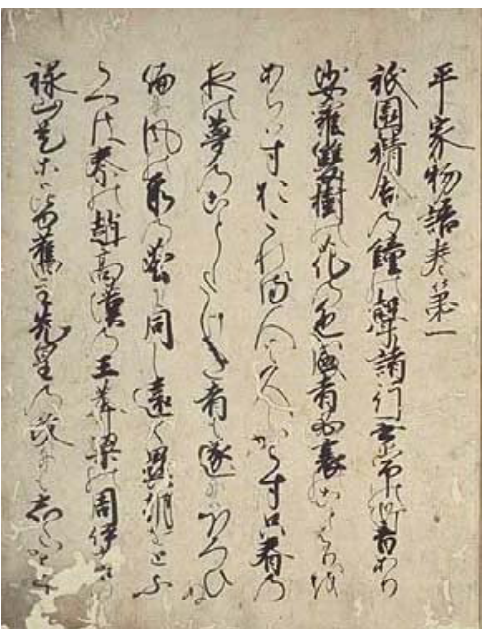
やがては書物の形態となつて読み本系そして流布本へと傾倒していく軍記物語という作品群に位置する。この資料として、[覚一本『平家物語』](#)〔[龍谷大学学術情報センター](#)所蔵〕という漢字平仮名文の作品が最も良く目にする資料であらう。

○漢字表記

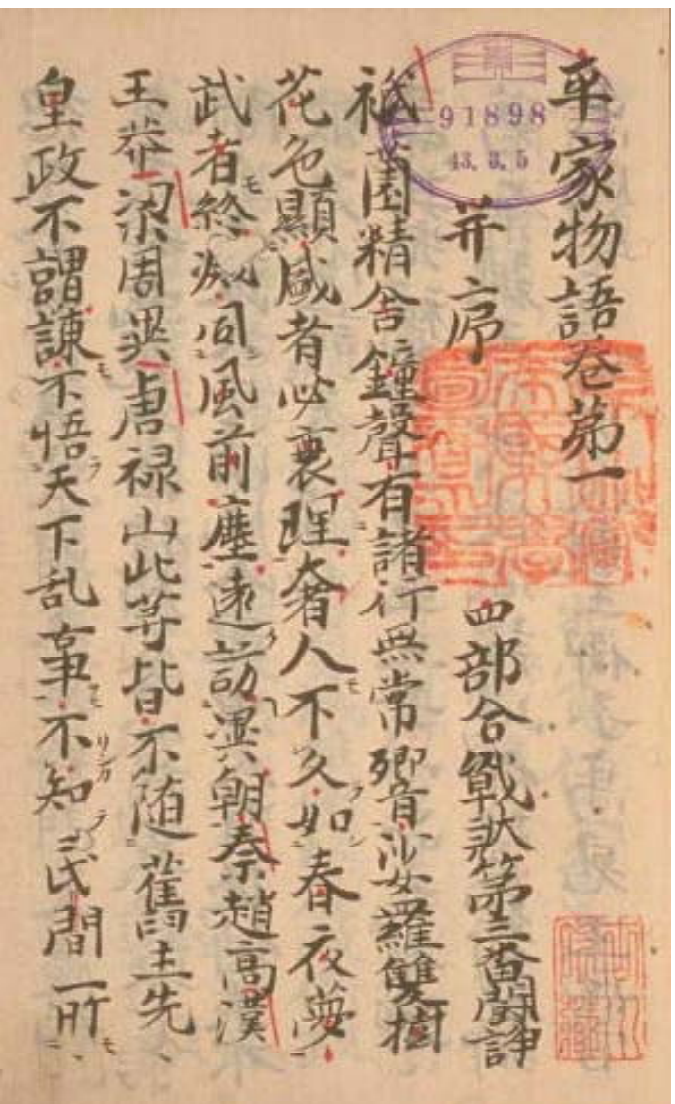
祇園精舎／鐘／聲／諸行無常／響／娑羅雙樹／花／色／盛者必衰／人／久／只／春／夜／夢／

○仮名表記

乃／の／のあり／の／乃／の／こと／はり／を／あらハす／おこれる／も／…しから／す／乃／の／乃／ことし／



漢字表記は、和語及び漢語両用に使われていることがこの資料から分かる。これに対し、真名本と呼ばれる系統の『平家物語』が知られる。真名本『平家物語』は、国語史資料として多くのことは事象を提供してくれている。諸本として前田家尊経閣文庫蔵熱田本『平家物語』、彰考館南都本『平家物語』、京都大学蔵平松家本『平家物語』等が知られる。



※伴信友翁蔵書、古本『平家物語』巻第一「四部合戦状第三番闘諍／并序」の資料

祇園精舎

平家物語第一

祇園精舎鐘聲諸行無常智有沙羅雙樹

之花色盛者必衰之理顯奢人不久只暮
夜如夢猛者終亡之偏風之塵同遠異朝訪
秦趙高漢王奔梁周黑唐祿山此等皆舊
主先王政不隨樂極諫不思入天下之亂事不
悟民間之愁所知士政者不交亡者共也近窺本
朝慈平將門天慶純交康和之義親平治之
信賴奢心猛更見社有士歿共親六波羅之介道
太政大臣平朝臣清盛公申人之消息傳表社心者

※京都大学蔵平松家本『平家物語』
卷第一、漢字片仮名交じり文
祇園精舎

その一つである大東急記念文庫蔵延慶本『平家物語』(全六卷十二帖)を基盤にそのことばの特徴を

学習してみることにしたい。

平家物語第一本

祇園精舎鐘聲諸行無常智有沙羅雙樹
花色盛者必衰之理顯奢人不久只暮
夜如夢猛者終亡之偏風之塵同遠異朝訪
秦趙高漢王奔梁周黑唐祿山此等皆舊
主先王政不隨樂極諫不思入天下之亂事不
悟民間之愁所知士政者不交亡者共也近窺本
朝慈平將門天慶純交康和之義親平治之
信賴奢心猛更見社有士歿共親六波羅之介道
太政大臣平朝臣清盛公申人之消息傳表社心者

○まず、覺一本の平仮名表記部分をカタカナ小書きにして記載していることが確認できる。

次に「**こと**はり」↓「理^リ」／「**あら**ハす」↓「**頭**」／「**お**ける」↓「**驕**」と和語仮名表記のこ
とばを漢字表記に改めていることが見て取れる。

三番目として、「必衰」「滅^{ホト}ス」「訪^{トク}」「秦^シ趙高^{テウ}」「漢^{カン}王莽^{マウ}」「梁^{リョウ}周異^イ」「唐^{トウ}禄山^{ロク}」「**舊**主^{キウ}」「**先**皇^{ケン}」
「**務**」^ム「**不**」^フ「**從**」^{ジュウ}「**民間**」^{ミンカン}「**愁**」^{シュ}「**承平**」^{セイヘイ}「**将門**」^{シャウモン}「**純友**」^{ジュンユウ}「**康和**」^{カウワ}「**義親**」^{ギシン}「**信頼**」^{シンライ}「**驕**」^{キョウ}「**猛**」^{マウ}「**取**々^{トトリ}」
「**遂**」^{スイ}「**滅**」^{メツ}「**詐**」^{セツ}「**哉**」^{サイ}「**王麗**」^{ワウレイ}「**猶**」^{ユウ}「**況**」^{キョウ}「**争**」^{ソウ}「**慎**」^{シン}「**マ**」のような漢字表記語に傍訓が所々
に見えている。

四番目に、漢字の傍らに声点を付載する。「秦」に「平声」「趙」に「去声」。「舊」に「去声」。

延慶本の文字研究資料については、『漢字百科大事典』（明治書院、平成八年刊）に、白百合女子大学
教授の山本真吾さんが一〇『平家物語』の異体字(三二七〜三四六頁)に正体字と異体字とを対比させ、
且つ、認定の所據として、『干祿字書』（杉本つとむ『改訂増補漢字入門』『干祿字書』とその考察』影印
資料付(昭和六十年、早稲田大学出版部刊)・観智院本『類聚名義抄』（天理図書館善本叢書と書之部第
三十二卷、昭和五十一年、八木書店刊及び正宗敦夫編纂校訂、風間書房刊)などを以て記載している。
これに見えない異体字表記として、「聞」文字表記があり、私が駒澤國文第四十二号に「延慶本『平家
物語』における「聞」文字仕様について」(一八五頁〜二三四頁)と題して、平成十七年三月に発表し
ているので参照されたい。

延慶本『平家物語』の先行資料

- 0, 延慶本平家物語傍訓索引／出版, [1961. 2]／形態事項: 112 p; 29 / B1和913. 43/35 **禁帯出**
- 1, 平家物語について: 応永書写延慶本／富倉徳次郎講述／出版: 東京: 大東急記念文庫, 1961. 5
／形態事項: 24 p, 図版2枚: 21 / 本学図書館請求番号H031/67-52
- 2, 平家物語: 應永書寫延慶本／吉澤義則校註／出版: 東京: 白帝社, 1961. 7 / 形態事項: 1092
p; 22 / 国文備付H612. 3/109
- 3, 平家物語: 応永書写延慶本／吉沢義則校註／出版: 東京: 白帝社, 1973. 1 / 形態事項: 1092
p; 22 / 注記: 久原文庫蔵応永書写を翻刻したもの／注記: 昭和10年刊の再版 / H612. 3/109 A・B
- 4, 延慶本平家物語／出版: 東京: 古典研究会, 1964-1965 / 形態事項: 四冊; 22冊 / 巻次等:
第一巻 巻次等: 第二巻 巻次等: 第三巻 巻次等: 別冊付録 / その他の標題: VT: 平家物語: 延慶本注
記: 大東急記念文庫所蔵 影印版 / 注記: 別冊付録: 延慶本平家物語解説・対校正表(伊地知鉄男編著)
／H612. 3/78-1 A・B・ . 国文備付
- 5, 平家物語: 延慶本／出版・頒布事項: 「東京」: 大東急記念文庫 / 出版: 東京: 汲古書院 (発売)
, 1982-1983 / 形態事項: 六冊; 27冊 / H612. 3/181-1〜六
- 6, 平家物語: 延慶本: 重要文化財 / 島津忠夫責任編集 / 出版: 「東京」: 大東急記念文庫 / 汲
古書院 (発売), 2006. 5- / 形態事項: 冊; 27冊 / 2 . 081/87-20/1
- 7, 校訂延慶本平家物語 / 栃木孝惟, 谷口耕一編 / 出版: 東京: 汲古書院, 2000. 3- / 形態事項:
冊: 21冊
- 8, 延慶本平家物語 / 北原保雄, 小川栄一編 / 出版: 東京: 勉誠社, 1990. 6-1996. 2 / 形態事項:
四冊: 挿図: 22冊 / 4 913. 43/64-1/1A
- 9, 延慶本平家物語全注釈 / 延慶本注釈の会編 / 出版: 東京: 汲古書院, 2005. 5- / 形態事項: 冊

※その他の研究書については記載しない。

延慶本『平家物語』の特異な文字解釈表現

○此殿を平家殊に悪み奉ける事は、大唐より難字の文を作て公家へ獻りたりけり。是を讀人なかりけるに、此殿の被讀たりけり。平家の為に悪しかりける故也。先度に文字三あり。一つには「國」の作、□。此をば「王なき國」とよまれけり。二には國の作の中に「分」と云字を三書たり、囧(□+分分分)。此をば「國乱て喧」と讀れたり。三は／身軀の身文字を二並て書たり、■(身+身)。此をば「したゝめにやらむぞ」と被讀たり。後の度には「家中家柱中柱、空中七日有否、海中七日有否」。此の文をも此殿み給て、唇をのべて咲て皆被讀たりけれども、承りける人々細に覺ざりけり。「是は平家の悪行の異國まで聞て、國の主を恥しめ奉る文なるべし」とぞ、後には人申しける。「P一―六二五、第二本94ウ⑧―95才②・一九三頁」 ※便宜上、平仮名漢字文に変換している。

ここで、『漢和大辞典』などに見えない異体字がこのように用いられている。本文中ではこれを「難字」として披瀝しこの譚は、『古事談』第六―二一と共通する処の後に見えている。

※囧(□+分分分)



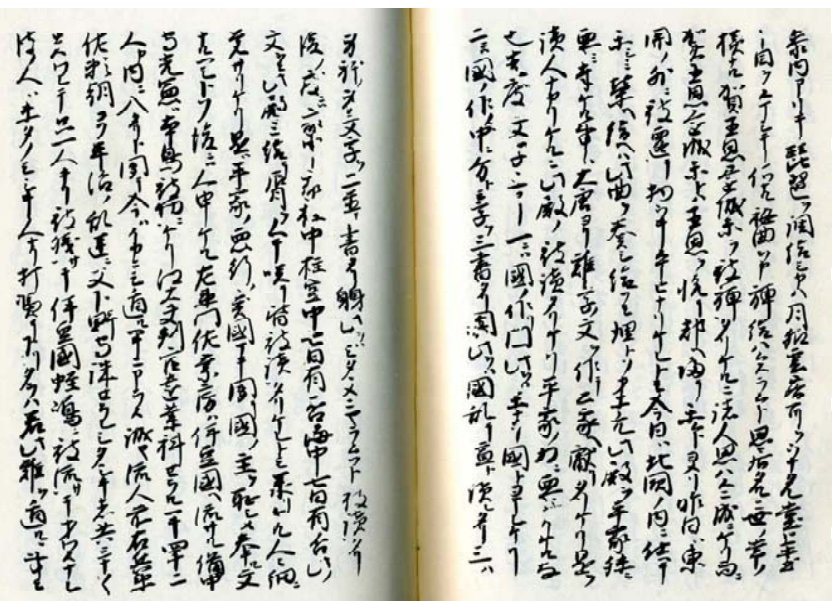
※■(身+身)



部首	正字体	延慶本平家物語の字体	延慶本平家物語の所在	異体字認定の所據
惠	惠	惠	一本10ウ8	○惠谷：惠堂焼正(観・法中六九)
愁	愁	愁	一本7ウ9	△惡惡下正(干) △惡：惡正(観・法中七六)
愼	愼	愼	二末10ウ8	
慢	慢	慢	一本28才3	○慢：慢谷(観・法中九四)
愼	愼	愼	一本10ウ10	
愼	愼	愼	一本15ウ2	○慢：愼上谷正(観・法下五四)
愼	愼	愼	一本30ウ8	△愼：愼下通正(干) ○愼：愼上通正(観・法中八六)
愼	愼	愼	一本26ウ2	○愼：愼下通正(干) ○愼：愼上通正(観・法中八六)
愼	愼	愼	一本11ウ10	△愼：愼(観・法中九九)
愼	愼	愼	一本40才8	△愼：愼(観・法中一〇)
愼	愼	愼	一本11ウ10	
愼	愼	愼	一本23ウ2	○戮：戮(観・僧中四一)
愼	愼	愼	一本24ウ5	
愼	愼	愼	一本10才10	○所谷：所(観・僧中三五)
愼	愼	愼	一本9才7	△泉：泉(観・佛下末二七)
愼	愼	愼	一本8才3	△扶：扶(観・佛下本七七)
愼	愼	愼	一本66才3	
愼	愼	愼	一本57ウ2	○拔：拔上谷(干) △拔：拔谷(観・佛下本五〇)
愼	愼	愼	二本64才10	

部首	正字体	延慶本平家物語の字体	延慶本平家物語の所在	異体字認定の所據
招	招	招	一本75才9	○招：招正(観・佛下本五七)
拜	拜	拜	一本12ウ3	
指	指	指	一本11ウ10	○指：指正指(観・佛下本三九)
振	振	振	一本54ウ6	
掠	掠	掠	一本21ウ9	○掠：掠(観・佛下本六五)
掠	掠	掠	三本89ウ1	
挿	挿	挿	三本12才6	○挿：挿(観・佛下本五八)
挿	挿	挿	一本49ウ5	△挿：挿(観・佛下本七三)
損	損	損	一本41才8	△損：谷崩字(干) ○損：損上谷下正(観・佛下本二一〇)
携	携	携	一本97才オク	△携：携(観・佛下本七七)
携	携	携	一本6才3	
擗	擗	擗	二中109ウ2	
擗	擗	擗	二中16才4	
擗	擗	擗	一本70才3	△擗：擗(観・佛下本五八)
擗	擗	擗	一本8才1	○擗：擗(観・佛下本七七)
擗	擗	擗	一本85ウ8	○擗：擗(観・佛下本七七)
擗	擗	擗	一本85才10	
擗	擗	擗	一本36才4	○支：支上谷(干) ○支：支谷正(観・僧中五二)
擗	擗	擗	一本9ウ1	
擗	擗	擗	一本23才7	

〈参考資料〉
※『漢字百科大事典』異体字表の一部



この中世の国語資料である延慶本『平家物語』は、学問僧侶の手になる資料であり、複数の書写者によって書記されている。この点に注目し、根来寺を中核とした本書の書記集団の学識力を知る上からも、一つ一つの語について他本と照らし合わせながら考察することがこれからの重要な課題である。意外と書写状況を見過ごしてしまっている活字の翻刻資料を知らねば成るまい。たとえば、「國」文字を凡て「国」にしたり、「讀」文字を「読」にしたりである。この資料中には、「佛」と「仏」と両用文字が用いられたりしているから統べて同じ表記することで見逃してしまう事柄もあるのではないか。

《追記》本学国文科の櫻井陽子さんは、「延慶本平家物語（応永書写本）の本文改編についての一考察―願立説話より―」「国語と国文学」二〇〇二年三月刊」で、延慶年間に書写された本文そのままではなく、延慶から応永の間に成る覺一本の本文を組み込んでいることを既に指摘されている。

《補訂追加》

① 疊字語の表現

○朝夕は南無慚愧懺悔六根罪障と懺悔し、心に心を警て、僅に半日に行き帰る道なれど、同處をゆ行帰り、白波さざなみ凌ぎつゝ、漫々たる蒼海にたゞよひ、塩風波間のこりの水、何度と云数を不知一。

浦路濱路を行時は、鹿の瀬、藤代、かぶら坂、十条、高原、滝の尻とも観念し、石岸いはほ高くして、青苔あつくむし、万木枝をまじへて、舊草道をふさげる谷川もあり。「第一末85才②③」

○祭文讀畢りにければ、いつより信心肝に銘じ、五躰に汗いよだちて、権現金剛童子の御影嚮、忽にある心地して、山風すごく吹きをろし、木々の梢もさだかならず、木の葉かつちりけるに、ならの葉の二、康頼入道が膝に散りかゝりたりけるが、虫のくひたる姿にて、あやしかりければ、入道是を取て打返しよく／＼みるに、文字の躰にぞ見なひたる。P1386「卷二、第一末91ウ・408頁」

○宗との者共は、栗濱の御崎に有ける舩共にはいのり／＼、安房の方へぞ趣ける。大介が輿は雑色共の昇たりけるが、敵近く責かゝりければ、輿をも捨て、逃にけり。近く付仕ける女一人ぞ付たりける。「第二末73才⑥」

○實語教一卷、是即山僧經也。仍陀羅尼品云く、奄、山法師、はら／＼／＼、よく／＼か／＼、はぢなや、そはか」とぞ書たりける。「第一卷・第二中49才・317頁」

② 《名跡》

○聖武天皇の書置せ給ける東大寺の碑文に云、「吾寺興復、天下興復。吾寺衰微、天下衰微」と云云。「第二末11ウ」

○縦一丈二丈の木なりとも、油黄嶋にて漫々たる海に入れたらむが、新羅、高麗、百濟、鷄旦へもゆられゆかで、安藝國、又新宮までよるべしやは。「卷二、第一末94ウ・414頁⑧」

且は、「契丹」のこと歟。